

開催趣旨

2023年は関東大震災の発生から100年にあたる。この100年のあいだ、多くの災害に見舞われた日本は、その都度、復興に向けた歩みを進めている。殊に2011年3月に発生した東日本大震災とそれに続く東京電力福島第一原子力発電所事故においても、今なお課題は多く緩急はあるものの、復興の歩みは着実に進められている。

関東大震災以来、災害の発生にともない、編まれてきたのが「災害誌」であり、同震災は「災害誌編纂上の画期」と評価されている。こうした震災記録の編纂について、東日本大震災において興味深い取り組みとして復興の目線を地域に置いた「大字誌」の編纂がある。これは、災害の記録に留まらず、避難を余儀なくされ住民が不在となった被災地において、地域の歴史、住民自らの「生きた証し」を残そうとする取り組みである。被災地の外にいる人びとが求める災害の記録は被害の状況であり、次の災害に備えた教訓である。しかしながら、被災地の、あるいは複合災害によって地域コミュニティが壊された人びとの求めるものは、それだけでなく、地域や先祖とのつながりや、そこで暮らしてきた「日常」の記憶も含むのではないか。

また、各地に整備される復興祈念公園は、震災の象徴として継承され、長く記憶に留められるだろう。しかしながら公園の整備にあたり、記憶と結びつく地域の景観もまた綺麗に整備されてしまう。このように考えたとき「復興」とは、それまで歩んできた歴史を見失う側面もあるのではないか。

こうした状況を鑑み、本定例研究会では、泉田邦彦氏をお招きし、当該問題にかかる取り組みをご紹介いただく。具体的には、浪江町請戸地区や双葉町両竹地区などでの大字誌編纂の取り組み、現在編纂が進む相馬市などでの自治体史の取り組み、さらにはご自身も住民・研究者の立場から携わっている福島県復興祈念公園の整備などの経験を通じて、復興をめぐる被災地の内と外、あるいは公と私との認識のギャップについてお話しいただく。被災地が求める記録とは何か、災害に接したとき私たちがアーカイブズに何が出来るのか、ご参加いただく皆さんとのディスカッションを通して改めて考える場としたい。